

2015年2月6日中部大学国際関係学部・大学院国際人間学研究科共催（青木澄夫教授企画）シンポジウム「東南アジアの日本人社会の形成と変遷」

16.10-16.50 村嶋英治「タイにおける日本人社会の形成と変遷」講演資料

日タイ関係年表

1887（明治20）年9月26日東京で「日本国暹羅国修好通商に関する宣言」調印、青木周蔵・デヴァウォングセ（外務大臣テーワウォン親王）

1888年1月20日、日本は上記宣言批准、批准書交換のためプラーヤ・パーサコーラウォン来日、帰路

パーサコーラウォンに同行して 山本鋳介（名古屋出身）、山本安太郎（福島出身）、真宗大谷派僧侶生田（織田）得能、善連法彦

1888 or 1889年、名古屋商人野々垣直次郎、長坂多門、シャム渡航

日本人はパーサコーラウォン邸を住所

1898年2月25日、バンコクにて「日本暹羅修好通商航海条約」調印、稲垣満次郎弁理公使・デヴァウォングセ（外務大臣テーワウォン親王）

日タイ関係に関する本格的な先行研究は乏しい

初期の日タイ関係で名古屋・愛知県人の役割が最も大きい

山本鋳介（1888—1896在タイ、1897年ハノイで病死）、

野々垣直次郎（1888年末来タイ、士族、県会・市会議員、1852—1904）、「名古屋市伊勢町八十五番戸士族野々垣直次郎」。神野（じんの）金之助（1849—1922）、森本善七（1855—1928）らと企画

長坂多門（1888年末来タイ、士族燐寸製造業）、

1891年5—6月シャム官吏クンペエの買付来名、大島宇吉（新愛知新聞[中日新聞の前身の一つ]創業者）ら、クンペエを仲介者として独自の貿易船を購入して大規模なシャム貿易計画、クンペエの自殺で頓挫

覚王山日暹寺（1900年6月仏骨（御遺形、仏舍利）奉迎、1902年建設地を名古屋と決定、1904年建立）、

第1次大戦後タイ米輸入運動（名古屋を中心としたお菓子製造業者）、

伊藤太郎助（愛知県弥福市出身、1905年来タイ、伊藤洋行主、1890.2.2-1946.10）、

小川藏太（1895年名古屋市生、1921年来タイ医者、小川医院、1930年5月愛知県医科大学医学博士、1935年日本人会会長、戦後ラオスで開業）

朝日新聞 1888年10月23日号

「暹羅貿易の計画、名古屋の紳商松村九助岡谷惣助等の諸氏は暹羅国へ直輸出を試みんことを思ひ立ちそれに就ては先づ彼国の国情風俗等を実視すること必要なりとて之を同地の士族にして是等の事に経験ある長坂多門（ながさかたもん）氏に託したれば氏は万事を担当し周旋最も勉めしを外務省に於ても此挙を賛し特に外務次官よりは曩に我邦に来遊ありし同国皇族デバウラングス親王殿下に宛て添翰を附せられ又大蔵省よりは印刷局製造の壁紙数百種の見本を交付せられたれば氏は渡航の準備を整へ去る十七日発足して神戸に出（いで）たりといふ其携帯せる品物は印刷局製壁紙、愛知県産有名の諸品、岐阜県監獄諸製品、肥前伊万里焼、三重万古焼、三重宝山村伊藤某の醤油清酒味醂、但馬城の崎の麦藁細工等なりと」（朝日新聞 1888年10月23日号）

杉山弥三郎功勞事蹟

「明治十九年七月[マ、正しくは明治20年9月]暹羅国外務卿本邦へ来遊あり当時当市[名古屋市]の豪商神野金之助[1849-1922]は野々垣直次郎を同国に派遣するの計画あり我が燐寸業も亦た此の必要を認めたるに依り玩弄物商陶器商七宝焼錦欄焼塗七宝業等と協議し特派員を暹羅国に派遣せんとし自分は他の各業者たる河村治助松村九助近藤秀之進本多与三郎鈴木弥六竹内固忠等と共に発起者となり派遣員を長坂多門と撰定し前記自分等七名の諸貨物代価合計凡そ三千元程並に旅費五百円を長坂多門に附托し暹羅国に渡航せしめ

尚ほ前頭三千元の諸貨物に対しては売上金の一割を報酬として長坂多門に附与すべきことを約束せしが当時当地方の燐寸業は皆な内地向製造而已にて他に此の企図に協同するものなく派遣者長坂多門も他の開墾事業の為め夥多の損害ありたる場合にて自ら出資すること能はざるより燐寸部分は全く自分一人にて諸般の出資を負担せり 明治二十年三月（マ）長坂多門暹羅国より帰朝して派遣中の実況を報告す附托貨物合計三千元に対する売上金は僅かに壹千元ありし而已結局二千元と旅費五百円は全損に帰し其視察の報告等亦各業者を満足せしむること能はず茲

に於て再び長坂多門より再渡航携帯貨物を出すべき交渉あるも大抵皆な之に応ずる者なきより自分及び河村治助より燐寸並に玩弄物若干を附托し別に京都より織物類若干を附托して暹羅国へ赴かしめたり然るに此回も亦非常に不結果にして長坂多門帰朝后燐寸等の売上代金は毫厘も受取ること能はず自分等は非常の困難を感じたり」(新修名古屋市史資料編編集委員会『新修名古屋市史 資料編 近代1』、名古屋市、2006年、712頁、「杉山弥三郎功勞事蹟」)。

大島宇吉翁伝

「五、暹羅遠征と貿易商会 恰もその頃名古屋の実業家本多某[長坂多門の筈]、野々垣某[野々垣直次郎]の両氏が商用を帯び暹羅国を巡歴して帰朝した。是より先翁は台湾、朝鮮等の国情を具さに調査されたが、両氏の帰朝を機会に暹羅国の事情を詳細聴取して文化の程度等を知ることを得、暹羅国との貿易を開き、先づ外貨を獲得して、然る後機を見て山田長政の軌を学ばんとする理想の下に秘策を胸中に描きつつあつた折柄、偶々暹羅の侍従長(マ)クンペーなる人が近く執り行はれる暹羅国皇帝即位式(マ)の調度品購入の御用命を奉じて来朝した。同氏が七宝焼購入の為め来名した機会を捉へ、一夕小幡の本邸に招じて暹羅の国情を具に聴取し且つ貿易の交渉を遂げて尽力方を依頼され、その翌日愛知県知事勝間田稔にも紹介の労を執られた。此の時クンペーは知事室を眺め廻して『恰も暹羅の宮中の如き立派な部屋』だと眼を瞠[みは]つて驚いたと云ふ逸話もある。

斯くして翁は長谷川五郎(現新愛知重役長谷川良平氏厳父)加藤喜久治(元新愛知支配人)等と共に亜細亜貿易商会を設立された。加藤氏は専ら貿易品の仕入れを担当し、長谷川氏は暹羅に渡航して販売の衝に当るべき諸般の手筈を整へ、呉服、雑貨、漆器、七宝焼等を仕入れる一方汽船の購入契約も了へ、大々的に南方進出の計画は進められた。然るにクンペーは東京滞在中持前の遊蕩性を發揮して花街に足を踏入れ吉原遊妓に耽溺して荒亡流連数十日文字通りの酒池肉林に浸り、重要なる王室の御用命を忘れたかの如くであつた。斯くするうちに暹羅国皇帝即位(マ)の大礼も目睫に迫り本国よりは櫛の齒を引く如く帰還命令は発せられた。クンペー、已むなく名残り惜気に吉原から御輿を上げ帰国の途次再び名古屋に立寄つた。翁は此の機会に同氏と同行暹羅に渡航せんとせられたがクンペーは之を拒み、皇帝即位の大礼終了後再び日本に来訪すべければその節同道すべしと約して西下し、神戸港より独逸船に便乗帰路に着いた。聽て船の香港に到着するやクンペーは甲板より海中に投身自殺を遂げた。果せる哉、クンペーの所持品は名古屋で購入せる七宝焼以外何物もなかつた。

斯くの如く、暹羅へ渡航後唯一の斡旋者と頼みにせるクンペーは自殺し、購入契約をせる汽船は不幸にも沈没し、加之世界情勢は刻々に変化して、翁の雄図も空しく、暹羅遠征も貿易事業も遂に挫折した。然し翁の一生を通じて此の当時が覇氣満々最も活気ある時代であつた。」(野田兼一編纂(尾佐竹猛鑑修)『大島宇吉翁伝』新愛知新聞社、1942年10月18日発行、136—137頁)。

参考文献

村嶋英治「戦前期タイ国の日本人会および日本人社会：. いくつかの謎の解明」（泰国日本人会 100 年史編集委員会編『タイと共に歩んで： 泰国日本人会百年史』、バンコク、2013 年 9 月、13-49 頁所収）

（<http://www.jat.or.th/wp-content/uploads/2014/06/100%20years'%20history%20of%20JAT.pdf>）

村嶋英治「日タイ関係 1945-1952 年--在タイ日本人及び在タイ日本資産の戦後処理を中心に」、『アジア太平洋討究』第 1 号、2000 年、早稲田リポジトリ

（<http://dspace.wul.waseda.ac.jp/dspace/handle/2065/13018>）

村嶋英治「バンコクの日本人」、泰国日本人会月刊誌『クルンテープ』2010 年 8 月号～2015 年 3 月号 56 回連載その後も継続（国会図書館（東京）、早稲田大学中央図書館所蔵）

大鳥圭介・川路寛堂・河野通猷『暹羅紀行』（中は、暹羅紀行、暹羅紀略（上・下）各 54p. +74p. +124p から成る）及び『暹羅紀行図』、工部省刊、1875 年 8 月

生田（織田）得能『暹羅佛教事情、附生田得能自伝』東京、真宗法話会、1891 年 2 月 10 日発行

岩本千綱『暹羅探検実記』興文社、東京、1893 年 10 月 16 日発行

宮崎滔天（寅蔵）「暹羅殖民始末」『国民新聞』1897 年 7 月 24 日～8 月 4 日連載（『宮崎滔天全集、第五巻』、平凡社、1976 年に再掲）

岩本千綱『暹羅老撾安南三国探検実記』博文館、東京、1897 年 8 月 30 日発行

石川安次郎編纂兼発行者『暹羅王国』、函南商会（阿川太良）、経済雑誌社、1897 年 9 月 9 日発行

来馬琢道『黙仙禅師南国巡禮記』、平和書院、1916 年